様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３９０４

研究課題名（和文）昭和戦前期におけるメディア議員と世論形成に関する歴史社会学的研究

研究課題名（英文）A Historical-Sociological Study of Media Politicians and Public Opinion Formation in the Pre-Showa Period

研究代表者
白戸　健一郎（Shirato, Kenichiro）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：８０７３７０１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1920年代後半から1930年代後半の普通選挙体制期において、「メディア議員（元ジャーナリストや新聞経営者などメディアに関係をもった議員）」が議会に歴史上もっとも進出した現象に着目し、この時期における世論形成メカニズムとその特質を明らかにすることを目的としている。本研究はその事例として『東京朝日新聞』出身の政治家・中野正剛を中心に分析した。中野正剛は政論家ジャーナリストとして活躍し、衆議院議員となってからも文筆と演説による言論活動を精力的に行い、世論形成を重視した。本研究は、中野正剛の生涯を軸にして、政治とメディアの力学の変遷と意義を解明している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、戦前のいわゆる大正デモクラシー期から戦中期にかけて増加した「メディア議員」について考察するものである。本研究は、中野正剛という「メディア議員」に着目して「政治のメディア化（メディアの論理により政治が展開される現象）」と世論形成のありようについて解明している。これまで十分に解明されてこなかった政治とメディアの関係を「メディア議員」という観点から、歴史社会学的に考察し、世論形成の構造と世論の意義を再考するものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the mechanism of public opinion formation and its characteristics during the period from the late 1920s to the late 1930s, focusing on the phenomenon of "media politicians" (former journalists, newspaper owners, and other media-related members) making the greatest inroads into Congress in history. As a case study, this study focuses on Seigo Nakano, a politician from the Tokyo Asahi Shimbun. Seigo Nakano was active as a political journalist, and even after becoming a member of the House of Representatives, he continued to actively engage in public opinion activities through writing and speeches, emphasizing the formation of public opinion. This study focuses on the life of Seigo Nakano to elucidate the evolution and significance of the dynamics between politics and the media.

研究分野：メディア史

キーワード：メディア　世論　中野正剛　政治のメディア化　メディア議員

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、1920 年代後半から 1930 年代後半の普通選挙体制期において、「メディア議員（元ジャーナリストや新聞経営者などメディアに関係をもった議員）」が議会に歴史上もっとも進出した現象に着目し、この時期における世論形成メカニズムとその特質を明らかにすることを目的としている。分析に際しては、「メディア議員」と「政治のメディア化 Mediatization of politics」という視角から「メディア―議会・政治家―世論」の三者関係を把握することを試みる。

これまでのメディア史研究において、1920～1930 年代はメディアが大衆化する時代として、特に多くの研究を蓄積してきた。また、マス・メディアが大衆動員の機能を担って総力戦体制を保持したという知見は確立されているといってよい（有山輝雄「戦時体制と国民化」（2001 年）、ルイース・ヤング『総動員帝国』（1999＝2001 年）、佐藤卓己『「キング」の時代』（2002 年））。他方、公論形成の機能を担ったメディアが大衆化したことにより、これまで理性的な討論を通じて形成される輿論から大衆的感情を反映する世論を形成するようにメディアの世論形成構造も変容した（佐藤卓己『輿論と世論』（2008 年））。このようにメディアの大衆化により世論形成の構造が変容してきたことは指摘されてきた。

だが、総力戦体制を構築していこうとする時期において、政治家や政党といったいわゆる政治権力がメディアといかなる関係を結んで、世論形成に寄与したかについては、実のところ研究は多くない（中心的なテーマとし、通史的に扱っているものとして佐々木隆『メディアと権力』（2013 年）がある程度である）。ただ、先述したように、1920 年代後半から 30 年代後半にかけてこそ、ジャーナリストやメディア経営者を経験した「メディア議員」がもっとも増加した。言い換えれば、メディアと政治権力との距離は最も縮まったのがこの時期であり、様々な場面で「政治のメディア化」が進んだ。それに着目した研究が、申請者も参加した佐藤卓己・河崎吉紀編『近代日本のメディア議員』（2018 年）であり、これはメディア業界を経験して議員となった政治家を量的に分析したものである。本研究は、量的研究で一定程度明らかになった「メディア議員」の実相と世論形成メカニズムを具体的な事例をもとに解明するものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、1920 年代後半から 1930 年代後半の普通選挙体制期において、「メディア議員（元ジャーナリストや新聞経営者などメディアに関係をもった議員）」が議会に歴史上もっとも進出した現象に着目して、当該期における世論形成メカニズムとその特質を解明することにある。

本研究はメディア史上の新知見をもたらすだけでなく、現代の情報社会における政治とメディアの関係を相対化する視角を与えることも目的とする。

３．研究の方法

研究方法としては、メディア議員の自伝や出版物、議会議事録などの政治家側の資料と新聞社社史やメディア業界雑誌、新聞記事などメディア側の資料の両者を扱い、メディアと議員との相互関係及び世論への影響関係を考察する。また、これに関わる象徴的な事例を取り上げて分析する。分析に際しては「メディア議員」と「政治のメディア化」という視角から考察する。「政治のメディア化」とは、メディアの論理により政治が展開される現象として説明されるものであり、本研究では政策や政見を実現させることに準拠する「政治の論理」と政見の内容よりも自己の影響力や存在感の拡散に準拠する「メディアの論理」を対概念的に扱い、歴史事象を分析していく。

本研究では、「メディア議員」の具体的事例として中野正剛を取り上げる。中野正剛は 1886 年に福岡県に生まれ、修猷館高校を卒業後、早稲田大学に入学し、その後、東京朝日新新聞社に入社して、政論記者として活躍した。パリ講和会議後の第 14 回総選挙において当選し、衆議院議員となる。以後、革新倶楽部、憲政会、立憲民政党、国民同盟、東方会と所属政党を変えつつ、文筆家、雄弁家としての評価を着実なものとしていく、戦時中、東方会党首として東条英機内閣と対立し、自決に至る。

中野正剛は、朝日新聞社が商業的な中新聞として台頭し始める時期において、政論を重視して第一次護憲運動と密接に連関した「明治民権史論」を連載し、世論形成に積極的に関与した。また、議員になって以後も演説や文筆を通じた世論形成を展開しつづけ、著作集はパンフレットも含めると 40 冊を超える。中野正剛は「書き続けた政治家」であった。また、議員になって以後、1928 年に地元福岡県の有力新聞紙『九州日報』を買収して経営者となることで、自らの選挙戦に有利なメディア環境を作り上げた。

中野正剛は文筆と演説に関わり、自身でもメディアを経営した。また、小政党でありながらも党首としてカリスマ的人気を獲得した。中野正剛は「メディア議員」としても特筆すべき政治家であるといえる。それゆえ、本研究では中野正剛の著作、新聞記事、議会演説、また、中野に言及した言説を主な資料とする。

４．研究成果

（1）中野正剛の修養と「個性」

1886 年に福岡に生まれた中野正剛は、1899 年に福岡県修猷館中学に入学し、1905 年に早稲田大学予科に進学する。日清戦争は幼少期に迎えるが、日露戦争は本格的な人格形成がはじまる頃に経験した。世代論としては、藤村操と同年生まれの中野正剛は「日露戦争後における新たな世代」として形式的には位置づけられるだろうが 、その内実を見ていくと、「煩悶青年」へむしろ反発しつつ、その前時代の天下国家を論じる「慷慨青年」として成長していった。他方、同時期には「修養論」ブームが生まれており 、特に日露戦争後の 1911 年に公刊された新渡戸稲造『修養論』は、第一高等学校校長という権威を背景にベストセラーとなっていた 。

こうした社会的背景のなかで、中野正剛は修猷館在学中に『同窓会雑誌』が作られたこともあり、そこに歴史人物論、修養論を掲載していく。修猷館中学卒業後の早稲田大学在学中も『同窓会雑誌』に寄稿しており、少年期から青年期という人格形成に枢要な時期の文章がそこに多く掲載された。ここで展開された修養論には中野正剛の理想とする人格＝自己が率直に語られており、後年の中野正剛の人格＝自己をある程度規定しているといってよい。ただし、中野正剛が修養をとおして形成してきた人格は、中野正剛の人格という内面にとどまるものではなく、社会的に言及され共有されるものとなっていった。

中野正剛の修養論を通じて理想的な人格を明瞭にしていく。その特徴には三点ある。第一に、中野正剛は当時、学生の間で巻き起こっていたハイカラ気風に反対して「九州男児独特の質実剛健の気象」を尊重していくことである。第二に、年長者から褒められる優等生的性格を嫌悪し、「燃ゆるが如き壮心」や「踊らんとする元気」といった情熱や行動を重視することである。第三に、中野は自己の短所を補うよりも長所を発揮し、それによって活動力を旺盛にして「悍馬の如き人」になっていくことを選択する。中野正剛が考えるにこうした活動力への偏重は時勢に即したものでもあった。日露戦争後、日本は満洲経営を重視しなければならなくなったが、満洲経営にあたっては「鋭角三角形」のような「悍馬」のような「活動的人物」の「発奮」が必要であると中野はみていた。

中野正剛は青少年時代の修養を通じて自己の理想的人格を作り上げ、それを保持し続けた。そして、修養、すなわち自己形成により作り上げられた人格は、中野正剛の内面にとどまるものではなかった。

中野正剛が議員として活躍した 1920 年代から 40 年代前半は、メディア史的にはメディアの大衆化が始まり、マス・メディアとしての実質を備え始める時期であった。また、政治史的には、1925 年にいわゆる普通選挙法が公布され、中野正剛も綱領の策定に携わった民政党と政友会との二大政党制が成立した時期であった。一般大衆が有権者となり、頻繁に政権交代がおこることで政治へ関心を抱かなければならない層が増大した。大衆化したメディア環境は、こうした関心を満たす政治情報を還流させた。大澤聡はこうした条件に最適な記事様式として人物批評が生まれ、流行したと指摘している（大澤聡『批評メディア論』（2016 年））。

中野の政治家になってからの代表的事績としては、田中義一陸軍大臣の機密費事件による議会での追及、同じく田中義一が首相時代に起きた張作霖爆殺事件に対する追及、さらに満洲事変後の政友会と民政党の協力内閣運動の推進とその失敗に伴う脱退、安達謙蔵を領袖とする国民同盟結成、東方会の創設により国民運動の展開などがあげられる。このような政治活動を通して中野正剛への関心も高まり、中野正剛論も 1930 年代以降数多く執筆されてきた。

そうした中野正剛論を整理してみると、中野正剛の闘争性や情熱、行動性を軸に定型化していることが確認できる。中野に関するほとんどの人物評論が、青少年期における修養論でかくありたいとした人格を指摘するものであった。それは中野正剛が少年期から形成してきた人格の延長線上にあるといえるし、中野自身の人格形成としては「成功」したとも言えよう。ただし、こうした中野がつくりあげた人格は、単に自己の修養の次元にとどまるものではなかった。

大澤聡は 1930 年代における人物評論の特徴として、服装やポーズにおいてお決まりの描き方をされ、文章が表現する語法も固定する「描写のテンプレート化」が進むことを指摘している。こうした「描写のテンプレート化」には「取柄」が必要になるとも大澤は述べるが 、中野正剛の「取柄」＝「個性」となった闘争性や情熱、行動性は、政治の場において目立ちやすく、特に言及しやすい性質を備えてもいた。ただし、たとえば満洲事変後の協力内閣運動とその失敗に伴う安達派の民政党脱退から国民同盟結成までの流れは、中野の猪突猛進的な行動力により促されたものであり、確かに中野の「個性」は実態から遊離したものでもなかった。

特に、中野正剛論が多く生産されたのは、満洲事変の勃発から満洲国建国を後押しして国際

連盟脱退に至る激変期にあり、かつ、「一九三五、六年の危機」が声高に唱えられた時期であった。そうした「不安、動揺、焦燥」が蔓延する「非常時日本」において、中野正剛の持つ「熱と力」と「行動」が期待を集めることとなった。危機や「非常時」を脱却するには行動力をもった「力強き存在」が待望されていた。そうであるがゆえに、中野正剛の「個性」はメディアに氾濫しつつ、中野待望論の一端を担うことになったと言えよう。

こうした状況をあえてメディア史的に表現するならば、修養により形成された中野正剛の「人格」（＝内容）は、社会不安と大衆民主主義化とメディアの大衆化を触媒にして、言及されやすい定型化した「個性」（＝形式）となり、メディア空間を還流した。井上義和は「政治の論理」と「メディアの論理」の翻訳能力がメディア政治家の政治資源増大において重要となることを指摘しているが、これをパラフレーズすれば、中野正剛の「人格」は時代に適合的な「個性」に「翻訳」されることにより社会的影響力を増大させた。（井上義和「メディア政治家の諸類型」佐藤卓己・河崎良紀編『近代日本のメディア議員』2018 年）。この翻訳をなし得たのは、行動力や闘争性に特化した中野の「個性」がパフォーマンスとして際立ち、かつ危機の時代に待望された「個性」であったことと、同時代に拡張した人物評論にとって言及しやすい定形であったことが要因としてあるだろう。

（2）中野正剛の選挙とメディア

中野正剛は 1928 年 1 月に出身地であり、選挙区である福岡県の有力新聞紙『九州日報』を買収して、自ら経営者となった。これは普通選挙法が施行されてから、初めての衆議院議員総選挙となる第 16 回総選挙の直前である。中野ははじめ演説を嫌っていたが、政治家になる頃にはむしろ得意としていた。1920 年代後半には中野は卓越した雄弁家として知られるようになり、民政党の遊説部長に就任するまでになっていた。

選挙においても中野正剛は積極的に演説会を開催し、自己の政見を聴衆に伝えていった。だが、中野にとって演説は字義通りの「多数の聴衆の前で直接自らの意見や主張、政見を述べる伝達手法」にとどまるものではなかった。中野正剛のような卓越した演説能力、すなわち傑出した雄弁性は、会場の聴衆に政見や主張を有効に伝達するのにとどまらず、新聞においても取り上げやすい性質を備えるに至った。とりわけ、「雄弁な中野正剛」という評価が定着すると、「雄弁な中野正剛」による演説会は有力なメディア・コンテンツになったのである。これにより中野の演説は、間接的コミュニケーションとして会場にいない読者にも内容や状況を伝達することが可能になった。特に、中野自身が経営した『九州日報』においては、自己の演説会の報道記事を増やしていくことは、容易なことであった。

すなわち、卓越した演説能力を持ち、中央からの評価も確立していた中野正剛の演説会という場は、本来「政治の論理」に準拠していた場であったが、卓越さを示し、人気があり、メディアをコントロール下に置いている中野正剛にとって、メディアに掲載させやすいメディア・コンテンツであった。それゆえ、演説会の「政治の論理」は「メディアの論理」に容易に翻訳可能なものとなった。

このようにして中野はメディアを自らの政治力の源泉の一つとしえた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 白戸健一郎	４．巻 7
２．論文標題 書評：スキャンダリズムとリスペクタビリティの間ー奥武則『黒岩涙香ー断じて利の為には非ざるなり』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 京都メディア史研究年報	６．最初と最後の頁 219-233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/KJMH_7_219	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 白戸健一郎	４．巻 8
２．論文標題 中野正剛における修養と個性	５．発行年 2022年
３．雑誌名 京都メディア史研究年報	６．最初と最後の頁 209-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白戸健一郎	４．巻 四八
２．論文標題 書評：大野哲哉『通信の世紀ー情報技術と国家戦略の一五〇年史』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 メディア史研究	６．最初と最後の頁 195-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白戸健一郎	４．巻 47
２．論文標題 昭和期の中野正剛における選挙とメディア‐普通選挙期メディア政治家の一事例	５．発行年 2020年
３．雑誌名 メディア史研究	６．最初と最後の頁 118-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 白戸健一郎
2．発表標題 昭和期の中野正剛における選挙とメディア
3．学会等名 メディア史研究会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 白戸健一郎	4．発行年 2022年
2．出版社 みずき書林	5．総ページ数 648
3．書名 昭和50年代論【「交叉する理想」139-184頁】	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関